

コホロギはキリギリス：萬葉集「蟋蟀・蟋」考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1998-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川上, 富吉 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1425

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



コホロギはキリギリス

——萬葉集「蟋蟀・蟋」考——

一、萬葉集の「蟋蟀・蟋」

『萬葉集』の現行のテキスト類では、

湯原王蟋蟀歌一首

暮月夜 ゆふぐよ 心毛思努尔 こころもしのに 白露乃 しらつゆの 置此庭尔 おくこのに 蟋蟀鳴毛 こほろぎなくも (8一五五一)

詠蟋

秋風之 あきかぜの 寒吹奈倍 さむくふくなへ 吾屋前之 わがやどの 浅茅之本尔 あさぢがもとに 蟋蟀鳴毛 こほろぎなくも (10二一五八)
影草乃 かげくさの 生有屋外之 おひたるやとどの 暮陰尔 ゆふかげに 鳴蟋蟀者 なくこほろぎは 雖聞不足可聞 きけどあかぬかも (10二二五九)
庭草尔 にはくさに 村雨落而 むらさめふりて 蟋蟀之 こほろぎの 鳴音聞者 なくこほろぎは 秋付尔家里 あきづきにけり (10二一六〇)

寄蟋

蟋蟀之 こほろぎの 待歡 まちよろこぶる 秋夜乎 あきのよを 寢驗無 ねるしるなし 枕与吾者 まくらとあれとは (10二二六四)

コホロギはキリギリス

川 上 富 吉

寄花

草深三くさふかみ 蟋こほろぎ 多おほ 鳴屋前なくやどの 芽子見公者はぎみにきみは 何時来益牟いつかきまさむ (10 二二七一)

旋頭歌

蟋蟀之こほろぎの 吾床隔尔あかこのべに 鳴乍本名なかつもとな 起居管おさるつつ 君乍戀尔きみにこふるに 宿不勝尔いねかてなくに (10 二三一〇)

の如く、仮名表記の例はなく、漢字表記で、

蟋蟀 7 語 (1552 題・1552・1558・2159・2160・2264・2310)

蟋 3 語 (2158 題・2264 題・2271)

の計 10 語のすべて「こほろぎ」と訓読されている。

コホロギは今は一種類の虫の名であるが、万葉のころは秋鳴く虫を総べて言ったのであろうという。(日本古典文学大系『萬葉集』八 1255 頭注。昭和 34 年 9 月)

今日いうこほろぎ類ばかりでなく、すずむし、まつむし、かんたんなどの、秋鳴く足を広くさしたか、という。(日本古典文学全集『万葉集』八 1552 頭注。昭和 47 年 5 月)

今日いう、こほろぎ類のほかに、すずむし・まつむし・きりぎりすなど、秋鳴く虫を広くさしたかといわれる。

今のおろぎのみならず、秋に鳴く虫の総称ともいう。(新潮日本古典集成『万葉集』八¹⁵⁵²頭注。昭和53年11月)

今のコオロギを主にマツムシ・スズムシなど秋に鳴く虫の総称かという。平安朝のキリギリスも同義であるが、今のキリギリスではない。(旺文社文庫『万葉集(中)』八¹⁵⁵²脚注。(元版『現代語訳対照万葉集』。昭和49年9月、昭和63年4月)

広くコオロギ・キリギリスら秋の虫をいうか。(講談社文庫『万葉集(二)』八¹⁵⁵²脚注。昭和55年2月)

今のおろぎか。秋鳴く虫の総称ともいう。(角川文庫『万葉集・上巻』十²¹⁵⁸脚注。昭和60年3月)

というように、「コホロギ」と訓み、「秋の鳴く虫の総称」ということになっている。

二 現行辞書類にみる「蟋蟀・蟋」

現行の辞書類では、

きりぎりす〔蝻斯・蟋蟀〕(鳴き声に基づく語か。スは鳥や虫など飛ぶものという語)①コオロギの古称。〔中略〕
②バッタ目(直翅類)キリギリス科の昆虫。〔中略〕盛夏、原野に多い。雄は、「ちょんぎいす」と鳴く。ぎす。ぎ
つちよ。はたおり。莎(さ)の鶏。〔後略〕(『広辞苑 第四版』)

こおろぎコオロギ「蟋蟀」①バッタ目コオロギ科の昆虫の総称。〈中略〉雄は夏から秋にかけて鳴く。〈中略〉いとど、ちちろむし。古名きりぎりす。〈中略〉②古くは、秋鳴く虫の総称。万一〇「わが宿の浅茅がもとに——鳴くも」〈中略〉（『広辞苑 第四版』）

きりぎりす【蝈蝈】〔名〕①昆虫「こおろぎ（蟋蟀）」の古名。▲季・秋▽*神楽歌—小前張・蟋蟀「〔本〕支利支利須（キリギリス）の妬（ねた）さ慨（うれた）さや御園生（みそのふ）に参りて木の根を掘り食（は）むで」*新撰字鏡「蟋蟀師 支利支利須」〈中略〉②キリギリス科の昆虫。〈中略〉夏から秋にかけて野原の草むらに多く、長いしるあしでよく跳躍する。雄の腹端には剣状の産卵管がある。雄はチョン、ギースと鳴く。北海道を除く日本各地に分布。ぎす。ぎつちよ。はたおり。▲季・秋▽〈中略〉③キリギリス科に属する昆虫の総称。〈中略〉キリギリス、クツワムシ、ウマオイ、ツユムシなど鳴くものが多い。（『日本国語大辞典』）

こおろぎこほろぎ【蟋蟀】〔名〕①古く、秋鳴く虫の総称。*万葉—八・一五五二「夕月夜（ゆふづくよ）心もしのに白露の置くこの庭に蟋蟀（こほろぎ）鳴くも」〈湯原王〉*十卷本和名抄—八「蜻蛉文字集略云蜻蛉〔蜻蛉〕二音 和名古保呂岐」②直翅目（ちょくしもく）コオロギ科の昆虫。〈中略〉雄は夏から秋にかけて鳴く。古くは「きりぎりす」といった。▲季・秋▽〈中略〉③コオロギ亜科に属する昆虫の総称。〈中略〉エンマコオロギ、コオロギ、ミツカドコオロギなど数種ある。古くは「きりぎりす」といった。いとど。ちちろむし。▲季・秋▽〈後略〉（『日本国語大辞典』）

こほろぎ「蟋蟀」（名）直翅目の昆虫。現在のこおろぎを含めて秋鳴く虫の総称という。すなわち松虫・鈴虫・くつ

わ虫その他を総括する。「白露の置く此の庭に蟋蟀鳴くも」(万一五五二)「秋風の寒く吹くなへ吾がやどの浅茅が下^{セト}に蟋蟀^{こほろぎ}鳴くも」(万二二五八)「草深み蟋^{こほろぎ}さはに鳴くやどの」(万二二七一)「蟋蟀^{こほろぎ}の吾が床^{トコ}のへに鳴きつつもとな」(万二三一〇)「蜻蛉^{こぼろぎ}古保呂岐^{こほろぎ}」(和名抄)【考】平安時代にコホロギと呼ばれた虫が現在のきりぎりすで、キリギリスと呼ばれた虫が現在のこおろぎであるという。「支利^{キリ}支利^{ギリス}須^スの妬^{あや}さうれたさや御園生^{ミヅナ}に参りて木の根を掘り食むでおさまさ角折れぬ」(神楽蟋蟀)のキリギリスは、こおろぎにあたる。コホロギのコホロは、その鳴き声を模したものと考えられる。(『時代別国語大辞典・上代編』)

とあって、『時代別国語大辞典・上代編』には「きりぎりす」の立項はない。
漢和辞典類では、

蟋蟀^{シニツ}

① 蟲の名。こほろぎ。きりぎりす。いとど。(『大漢和辞典』)

蟋蟀^{シニツ}

① こおろぎ。② きりぎりす、いとど、はたおり。

【古訓】「名義抄」蟋蟀、キリ／＼ス【篇立】蟋キリ／＼ス

蟋蟀^{シニツ} こおろぎ。(白川静『字通』)

とあって、国語辞典類と同様で、「コオロギ」と訓んでいることがわかる。

三、古辞書類

次に古辞書類を見てみよう。

『新撰字鏡』虫部第八十三に、

蟋蟀帥日

所伴蟋蟀
音利一頃

とあつて、「キリ／＼ス」と訓み、「コホロギ」とはない。

『和名類聚抄』卷十九蟲多類第二百四十に、

蟋蟀

兼名苑云蟋蟀悉率一名蜚渠
音扶和名本
里木里須

とあつて、「キリギリス」と訓み、「コホロギ」とはない。ちなみに、「コホロギ」は、

蜻蛉

文字集略云蜻蛉精列二音和
名古保呂木

とあつて「蜻蛉」の訓みで、「蟋蟀」（キリギリス）と區別していることがわかる。

『類聚名義抄』僧下百十四虫に、

蟋蟀

蟋蟀ニキリギリス
上ニ蟋蟀ニキリギリス

とあつて、「キリギリス」の訓みだけで、「コホロギ」の訓みはない。ちなみに、

蝻

渠ニテ一供ニキリギリス

蜻蛉

蜻蛉ニ文浄蜻蛉ニ
下ニケラハハ蜻蛉

蜻蛉

蜻蛉ニ
蜻蛉ニ

とあつて、「蝻」に、「キリギリス」、「蜻蛉」に、「コホロギ」とある。

『伊呂波字類抄』十卷本第八㊦動物付動物牒に、

蝻

キリギリス

蜻蛉

キリギリス

蜻蛉

キリギリス

蟋蟀

キリギリス

蟋蟀

とあり、第七㊧動物付動物牒に、

青蛉

青蛉ニ
青蛉ニ

とあつて、「蟋蟀」「蜻蛉」ともに「キリギリス」と訓んでいる。さらに、『日葡辞書』には、「キリギリス」の立項はある

が、「コホロギ」はなく、『和英語林集成』には、「カウロギ」「キリギリス」ともにあるが、いづれも「Cricket」(コオロギ)と訳している。

以上、古辞書類の規範性から見れば、「蟋蟀・蟋」は「キリギリス」と訓読すべきことが明らかとなった。

コホロギはキリギリス

四、現時点の全注釈・研究

では、現時点のいわゆる全注釈・研究類ではどうなっているのかを見てみよう。

『研究資料 日本古典文学⑤ 万葉・歌謡』（昭和60年4月）の「天智天皇の諸皇子・諸皇女」の項（神永あい子、執筆）の「巻八、一五五二」において、

蟋蟀 現在のこおろぎだけでなく、松虫・鈴虫・轡虫くわちを含めた、秋の虫の総称。

と注するのみで、『新撰字鏡』・『和名抄』などの引用はない。いわゆる訓詁注釈の初歩の注ではないということである。また、「巻八、一五五二」の「蟋蟀」は、万葉集初出例であり、作者名の明記（湯原生）された唯一例であり、巻八は四季分類の最初の巻であることなど、文学史的に重要な意味を持つ初出例であること等を指摘しておくことが必要である。（注1）

『万葉集全注釈 巻第十』（阿蘇瑞枝、平成元年5月）の、「二一五八」題について、

こおろぎは、直翅目こおろぎ科の昆虫であるが、万葉集のそれは、現在のこおろぎのみを指すのではなくて、まつ虫・鈴虫・くつわ虫なども含めた、秋に鳴く虫の総称という。集中、七首に詠まれているが、巻八・一五五二（秋雑歌 湯原王）、巻十・二二五八～二二六〇（秋雑歌）、二二六四、二二七一、二三一〇（秋相聞）のように、巻八と巻十の秋の部にのみ見える。

とし、「二二五八」の語注に、

○こほろぎ鳴くも コホロギは、既述（「蟋を詠む」の条）。「蟋蟀」は、倭名類聚鈔に、「和名 木里木里須」とあり、「蜻蛉」を「和名古保呂木」とするが、万葉集の「蟋蟀」は、いずれも四音の箇所であり、また、「蜻蛉」は、文選の李善注に「蟋蟀、虫名、俗に之を蜻蛉と謂ふ」とあるので、蟋蟀をコホロギと訓むのである。中古以降、コホロギをキリギリスというようになったとされる。モは、感動の意をあらわす終助詞。

とし、「二三一〇」の語注に、

○こほろぎ 既出、二二五八参照。万葉集におけるこほろぎは、現在のこほろぎだけではなく、松虫・鈴虫・くつわ虫などを含めた、秋に鳴く虫の総称。

とあって、『和名抄』を引用し、四音の字音上、俗語「コホロギ」の訓みを採用している。

『万葉集全注 卷第八』（井手至・平成5年4月）の「二五五二」の語注に、

○蟋蟀 今日こほろぎと呼ばれている昆虫をはじめ、秋の草むらで鳴く、鈴虫、松虫、くつわ虫等の総称。コホロギはその声を擬えたものであろう。ほかに「我がやどの浅茅が下に蟋蟀鳴くも」（10・二二五八）、「蟋蟀の我が床のへに鳴きつものとな」（10・二三一〇）などがある。なお、こほろぎは平安時代にはキリギリスとも呼ばれた（全釈）らしく、倭名抄に「兼名苑云、蟋蟀、一名葦モリギリ須ス」。また「文字集略云、蜻蛉コホロギ」とあって、後者の「蜻

蛭きりぎりすについて文選李善注に、「蔡邕月令章句曰、蟋蟀、虫名、俗謂之蜻蛚こほろぎ」(卷二三、張孟陽、七哀詩)とあるの
で、「蟋蟀きりぎりす」と「蜻蛚こほろぎ」と考えられるからである。

と、「蟋蟀きりぎりす」としてゐる。

『万葉集釋注四』(伊藤博、平成8年8月)の、「二五五二」の語注に、

蟋蟀 今日のおおろぎと同じらしい。単に「蟋」とも(10二二六四題詞ほか)。平安期に入つてこれをきりぎりすともいつたので、諸説がある。今のおおろぎのみならず、まつむし、すずむし、きりぎりすなど、秋に鳴く虫の総称と見る説(佐佐木『評釈』)はもっともあたりさわりが無い。『倭名抄』(八)に「蟋蟀、一名蜚キリギリス、蛭キリギリス」とあり、また「蜻蛚こほろぎ、古保呂コホロギ蛭とある。一方「蜻蛚」は、『文選』李善注に「蟋蟀、虫名、俗謂之蜻蛚」(卷二十三、張孟陽七哀詩)とある。

とあつて、「蟋蟀」即「蜻蛚」で、「コホロギ」の訓みを採用し、「秋に鳴く虫の総称」としてゐる。

五、訓読「コホロギ」説

『校本万葉集』の底本である「西本願寺本」は「キリギリス」であり、『万葉代匠記』以前の古写本・古注釈書類はすべて「キリギリス」と読んでおり、『新撰字鏡』・『和名抄』など古辞書類が、「蟋蟀・蟋」を「キリギリス」と訓読してゐるにもかかわらず、『和名抄』の「俗にコホロギと云ふ」の「コホロギ」を、現行のすべてのテキスト・注釈書・辞書がと

っている原因は、一つには、江戸末・明治・大正・昭和と永く広く読まれた『万葉集略解』にあり、それを基に万葉語を採用した『大日本国語辞典』(上田萬年・松井簡治、大正4年初版)^(注2)にあったと思われる。その『略解』の「巻八、一五五二」に、

蟋蟀旧訓きりくすとよみたれど、すべて集中此字をきりくすと訓ては、しらべとゝのひがたければ、翁はこほろぎとよまれし也、和名抄文字集畧云、蜻蛚精列二音、和名古保呂木と有によりて也、春海云、蜻蛚といふ名は文選晋張孟陽七哀詩に、仰聽離鴻鳴、俯聽蜻蛚と見え、李善が註に、易通卦驗曰、立秋蜻蛚鳴、蔡邕月令章句曰、蟋蟀虫名、俗謂之蜻蛚といひ、又古詩に蟋蟀吟、蜻蛚吟と通はしては常にいへり、かゝれば蜻蛚と蟋蟀は同物なれば、蜻蛚に古保呂木と有にて、古より蟋蟀にこほろぎの名有事しるし、且和名抄に兼名苑云、蟋蟀一名蜚、和名木里木里須とみえたれば、きりくすの名も古くいへる名なるべし、其外委しく春海論ひおける事あれどこゝに畧きぬ、

とあって、翁(賀茂真淵)の『万葉考』の本文には、『こほろぎ』と訓んだだけで、その理由を述べてはいない。

はじめて、「コホロギ」説を提唱したのは、荷田春満『万葉集童蒙抄』である。その「巻八、一五五二」に、(傍線は、川上)

湯原王蟋蟀歌一首 蟋蟀、和名抄第十九虫多類云、蟋蟀、兼名苑云^{悉率二音}一名蜚^{集音反一音拱、和名木里木里須} 如此あれども上代はこふ

ろぎと訓したりと見えたり。今云きりくすとは不^レ合也。字書には蜻蛚^{コホロギ}の一名を蟋蟀と注せり。しかれば紛れたる事あるか當集の歌に、此蟋蟀をきりくすと讀みては歌の意合はず。こほろぎと讀までは聞えぬ歌共あり。後京極攝政の、きりくす鳴や霜夜の御歌も、こほろぎのなく霜夜にてあるべし。きりくすは霜など降る節鳴くものにあら

ず。これらも不審の義也此歌の次第も、時雨のふる時節は、も早きりくすは聲を出すものにあらず。古と今とは時令も替りし故、その時代はきりくすの鳴きけるか。此義不審也。蜻蛉の一名を蟋蟀ともいひし故、こほろぎの字に用たるにもやあらん。此歌の詞は、きりくすと讀みても足り餘りも無く、一字餘り迄の歌によまるれ共、此集の歌によりて、きりくすとは讀難き歌あり

とし、「卷十、二二五八」に、

蟋蟀の事前に注せる如く、きりくすと讀みては此歌とも不_レ合也。こほろぎの事と見ゆるを古く誤り来れる也へ中略_レ此歌きりくすと讀みては、時節も秋更けたる時節、又詞も餘れり。後京極殿の、霜夜のさむしろにと詠給ふも、こほろぎにて無ければ不_レ合義此歌に同じ。和名にも、きりくすと擧げたれば、順も考へ洩らされたる歟。兎に角きりくすは、仲秋の頃は最早稀に鳴く也。夏専と鳴くなれば、時代の変化にて、昔と今とは時令もたがへる事あらんか。なれど歌の詞悉くきりくすと讀みては字餘りになる也

とし、「卷十、二二六〇」に、

蟋蟀之 此之の字助語などと注せる説有。是きりくすにて有まじきと見る證也。きりくすと讀まば、之の字無くてもきりくす鳴く声聞けばと讀みて済むべきを、之の字を加へたるはこほろぎのと読める故也。此題三首の歌皆きりくすと讀みては字餘り也。心得難し。こほろぎと讀まではならぬ様に書たるを、助字或ひは字餘りなど無理なる説をなせり

秋付 諸抄は秋になりたると云意と釋せり。秋も夜寒に霜降る頃の意によめる歌もあれば、秋盡にと云意か。又秋暮にけりと云意共聞ゆる也。付は盡の借訓又秋つくれにけりの詞共聞ゆる也。暮を約すればきにつゞまる也。尤秋になりけりと云ふ共、さしてかひ無かるべけれ共、付を成と云の義不^レ詳也。きりく^{／＼}すは夏こそ鳴くなるを、これが聲を聞けば、秋になりけりと云ふ譯如何にも不^レ濟説也

とし、「卷十、二七七」に、

蟋の字計を書たる事心得難し。蟋の字を脱せるなるべし。是も仮名本、諸抄物には、きりぎりすと訓じたり。是迄の歌、悉皆字余りに読まねばならぬ歌也。こふろぎと読みては、一首も字余りの歌は無き也。さればこふろぎと訓ずべき事明也。

として、「きりぎりす」と五音で読むと字余りとなるから「こふろぎ」と四音で読むべきであると主張しているのであるが、これは近世歌学上の主張であつて、『万葉集』所収の歌が歌われ（作られ）た時代、また、編集された時代に戻してみれば、字余り、字足らずの例は多量にあるわけであるから、「蟋蟀・蟋」にのみ字余り説を適応させるのは、索強付会で、歴史的事実を歪曲した妄説というしかない。また、季節として、「時雨のふる時節は、も早きりく^{／＼}すは聲を出すものにあらず。」（8一五五二）、「きりく^{／＼}すは、仲秋の頃は最早稀に鳴く也。夏専と鳴くなれば、」（10二一五八）・「きりく^{／＼}すは夏こそ鳴くなるを、これが聲を聞けば、秋になりけりと云ふ譯如何にも不^レ濟説也。」（10二一六〇）・「待歡とは、文選等にも蟋蟀俟^レ秋吟と有。蟋蟀は秋待ちて鳴くものなれば也」（10二一六四）とあつて、その鳴く季節をもう一つの証拠にもしているが、この昆虫の生態学上の分析は別の機会に譲ることとして、今は訓みについてのみ考察したい。この字余

り説を根拠とする「コホロギ」説が、賀茂真淵『万葉考』、橘千蔭『万葉集略解』、さらに『万葉集古義』を経て、現代の諸テキスト・諸注釈書類に至っているのである。

六、「キリギリス」説

「蟋蟀・蟋」を「コホロギ」と訓む説は、その字音四音という字余りにならないということが立論の根拠となっているのであるが、『万葉集』には、字余りの歌はかなりの量にのぼることからみて、論拠薄弱で挙証責任に欠けると言える。私見としては、『万葉代匠記』以前の古写本・古注釈類が「キリギリス」であることと、古辞書類が「キリギリス」と訓読しているという二点から「キリギリス」に戻すべきことを強く提言したい。

さらに、古代歌謡の「神楽歌」（日本古典文学大系『古代歌謡集』（小西甚一校注）に、

（蟋蟀）
蟋 蟀

本

55 蟋蟀の 妬さ慨さ や 御園生に参りて 木の根を掘り食むで おさまさ 角折れぬ
折れぬ

支利支利須乃 祢多佐宇礼太佐 也 見曾乃不仁万為利天 支乃祢乎保利波武天 遠佐末佐 津乃遠礼奴 遠
佐末佐 於佐末佐 津乃於礼奴

末

おさまさ 妬さ慨さ 御園生に参りて 木の根を掘り食むで おさまさ 角折れぬ

於左末左 祢多佐字礼多佐 見曾乃不仁末伊利天 支乃祢遠本利波牟天 於左末左 津乃遠礼奴

とあって、「支利支利須乃」と仮名書き六音の例があり、『梁塵秘抄』四句神歌に、

茨うばらこぎの下にこそ、鼈いたちが笛吹ふえき猿奏さるかなで、かい奏かなで、蟲いぬこ螽磨まろめて拍子つく、たて蟋蟀きりぎりすは、鉦鼓このく好よき上手(三九二)

とあることなども、「キリギリス」説を補強することができる。また、『新撰万葉集』（群書類従本に拠る）上、秋歌卅六首の中、

① 秋風丹 綻アキカゼニ沼良芝藤ホコロビヌラシ袴綴フガヘカマツマリサセ刺世砥手セト 葦鳴テギリくヌナク

商飈アキカゼニ颯々葉輕々。壁葦流音數處鳴。曉露鹿鳴花始發。百般攀折一枝情。

③ 吾而ワレノミ己哉カ憐アハレト砥思モ 葦マキ鳴ハレト暮景オモ之倭キリく瞿麥ヌナク

秋來曉暮報ワレノミ吾聲カ蟋蟀アハレト高低壁下鳴。耿耿長宵驚オモ驚眼キリく（眠イ）處。誰言愛ヌナク汝最丁寧。

②① 爾ニハカニ裳風モカゼノ之涼スズシク吹塗フキヌル立カ秋日アキツヒ砥者ト郁子ハムベ裳モ云イヒケリ藝里

涼飈急扇物光衰。應ニハカニ是爲モカゼノ三秋氣早來。壁スズシク葦フキヌル家々音始亂。蓼芽處アキツヒ々ト萼初開ハムベ。

③① 秋風アキカゼノ之吹フキタテス沼禮者レバ 葦キリく己歎スオガ綴ツヤリト砥木コノ之葉緒ハ曾刺フゾサス

秋風觸處アキカゼノ葦鳴。寒木葉零堆衣一單。夜々愁音侵レ客耳。朝々餘響滿ニ庭壇。

の四カ所に、「蟋蟀1例・葦5例」があり、「蜻蛉」の例はない。①の歌は、『古今集』卷十九・雜体の「一〇二〇」番歌で、小倉百人一首にも採られているが、もともとは、「寛平后宮歌合」の歌で、在原棟梁の作。②の歌は、『後撰集』卷五・秋歌

上の「二二七」番歌で、「是貞親主家歌合」の歌で、読み人しらず。なお、『新撰萬葉集』撰者の菅原道真の詩で、「蟋蟀」の例は、『菅家文章』巻四・「感秋」(三二六)に、「蟋蟀雨中聲」(寛平二年作)がある。

また、『和名類聚抄』の編者であり、『後撰集』の撰者であり、万葉集訓点作業をした源順の詩で、『天徳三年閏詩行事略記』第六に、「葦声入夜催」で橘直幹との七言律詩がある。^(注5)

次に『和漢朗詠集』(新潮日本古典集成本に拠る)上、秋の虫に、

327 切々たる暗窓の下 嚶々たる深草の中 秋の天の思婦の心 雨の夜の愁人の耳 白

328 霜草枯れなんととして虫の思ひ 苦なり 風枝いまだ定まらずして鳥の栖むこと難し 白

329 床嫌短脚 葦声 風枝未定鳥栖難 白

床には嫌ふ短脚にして 葦の声 聞しきことを 壁には厭ふ空心にして 鼠の孔の穿たることを 野

330 山館の雨の時に鳴くこと 自ら暗し 野亭の風の処に織ることなほ寒し 直幹

山館雨時鳴自暗 野亭風処織猶寒 直幹

331 叢切怨遠風聞暗 壁底吟幽月色寒 順

叢辺に怨み遠くして 風聞暗し 壁の底に吟幽かにして 月の色寒し 順

332 いま来むと 誰頼めけむ 秋の夜を 明かしかねつつ まつ虫の鳴く

いま来むと 誰頼めけむ 秋の夜を 明かしかねつつ まつ虫の鳴く

333 きりぎりす いたくな鳴きそ 秋の夜の 長き思ひは われぞまされる

素性

とあって、「蟋蟀」の用字はないが、「葦」(329)あるいは「きりぎりす」(333)とあり、「三三〇」の詩は、橘直幹の詩で、これは、菅原道真との詩合せ、『天徳三年閏詩行事略記』(註5)に載る「葦声入夜催」の右方の詩の一節であり、「三三一」が左方の源順の詩の一節である。「三二九」の「葦声」は、頭注に、

『詩経』豳風、七月「十月蟋蟀我が牀下に入る」。

とあり、「三三〇」の頭注に、

『文選』古詩に「促織東壁に鳴く(春秋考異郵に曰く、立秋に趣織鳴く。宋均曰く、趣織は蟋蟀なり)」とある。

とあり、「蟋蟀」の例であることがわかる。「三三三」は素性とあるが、『古今集』秋上(196)に「人のもとにまかれりける夜、きりぎりすの鳴きけるを聞きてよめる 藤原忠房」とある。

なお、八代集における「キリギリス」は、「古今6・後撰2・後拾遺1・金葉1・千載2・新古今6」の計18例があり、「コホロギ」の例はない。(註6)

以上、奈良・平安中期ぐらいまでのひとつの傾向として、『万葉集』をよく読んだ、菅原道真・源順あたりが、中国詩文の「葦・蟋蟀」を下敷きに、「キリギリス」を歌っているということから見て、『万葉集』の「蟋蟀・蟋」は、「キリギリス」と読んでいたことが傍証できるであろう。

七、中国の詩文の影響

中国文学の影響としては、先ず『詩経』である。『詩経』には、二カ所に「蟋蟀」が主要な詩材として歌われている。その一つは、「唐風」の初めにある「蟋蟀」である。（集英社版『漢詩大系』のち『漢詩選』の『詩経』（高田眞治）に拠る）

蟋蟀

蟋蟀

蟋蟀在堂 歳聿其莫

蟋蟀堂に在り 歳聿に其れ莫れん

今我不樂 日月其除

今我樂まずんば 日月其れ除らん

無己大康 職思其居

己だ大に康む無かれ 職として其の居を思へ

好樂無荒 良士瞿瞿

樂を好むも荒むこと無かれ 良士は瞿瞿

蟋蟀が堂に鳴く 歳も暮れようとする

今の中に樂しまねば 月日は過ぎ去ってしまふ

だが樂しみに耽つて 家業を怠つてはならぬ

樂しみに溺れるな すぐれた人は慎しみを持つ

これは、

蟋蟀は、晉の僖公を刺るなり。俟、礼に中らず、故に是の詩を作つて以て之を閔む。其の時に及んで礼を以て自ら責

楽せんことを欲するなり。此れ管なり。而るに之を唐と謂ふは、其の風俗に本く。憂へ深く思ひ遠く、俟にして礼を用ふ。乃ち堯の遺風有り。〔詩序〕

唐の俗、勤儉なり。故に其の民間、終歳劳苦して、敢て少しも休せず。其の歳晚れ務め間なる時に及んで、乃ち敢て相与に燕飲し、楽為して言ふ云々。其の憂へ深くして思ひ遠きなり。蓋し其の民俗の厚くして、前聖遺風の遠きこと、此の如し。〔集伝〕

とあつて、「蟋蟀在堂」という用例は、『万葉集』の「蟋蟀」の歌の典拠にはふさわしくない。もう一つの「豳風」の「七月」の「蟋蟀」の影響が大であると思われる。その第一聯は、

五月斯螽動股

五月に斯螽股を動かす

六月莎雞振羽

六月に莎雞羽を振ふ

七月在野

七月野に在り

八月在宇

八月宇に在り

九月在戶

九月戸に在り

十月蟋蟀入我牀下

十月には蟋蟀我が牀下に入る

穹窒熏鼠

穹窒して鼠を熏じ

塞向墜戸

向を塞ぎ戸を墜る

嗟我婦子

嗟我が婦子

曰為改歲

曰に改歳の為めに

入此室処

此の室に入りて処れ

五月には斯螽が股を動かして鳴き

六月には莎雞が羽を振って飛ぶ

七月には蟋蟀が野に鳴き

八月には宇に近づき

九月には戸口に

十月には牀の下で鳴く

隙間をふさいで鼠をいぶし出し

北窓をふさいで扉の編を塗る

ああ わが家の嫁や子等よ

歳が改まるので

室にいて歳を迎えよう

とあって、「蟋蟀きりぎりすは、七月には野原に居るが、寒さが近づくと、次第に人家に近づいて来て、八月には簷ぬきの下に近づき、九月には戸口のところまで来るようになり、十月には床との下までもぐりこんで鳴くようになり、虫の移動することによって、寒い冬が迫って来たことが知られる。」というこの詩が、おそらく、『万葉集』をはじめ、平安朝の詩人、歌人たちの「蟋蟀・葦」の重要な下敷きになっていたのであらうと推定できる。

なお、『文選』にも多くの典拠があったと思われるが、いくつかを示してみれば、「卷第二十九」の「雑詩上、古詩十九首」に、

明月皎夜光促織鳴東壁

春秋考異郵曰立秋趣織鳴宋均曰趣織蟋蟀也立秋女功急故題之禮記曰季夏蟋蟀在壁

晨風懷苦心蟋蟀傷局促

毛詩曰鴝鵒晨風謂彼北林宋見君子憂心欽歎蕭蕭篇曰懷抱也毛詩序曰蟋蟀微刺者傷公侯不中禮漢書景帝曰局促効驢下駒

とあり、「卷三十三」「九辯五首」に、

哀蟋蟀之宵征

見蟋蟀之夜行自傷放棄與蟲爲變也或曰宵征謂七月在野八月在宇九月在戶十月蟋蟀入我牀下是其宵征行也

とあり、この「九辯五首」は、『楚辭』卷第八「九辯章句第八（宋玉之所作也）」とある。こうした詩句が、湯原王をはじめとする万葉集第四期の歌人たちに受容されたのだらうと推定される。

『文選』の例を示したので、ついでに補足として、『文選読み』の例として、「蟋蟀」が「キリギリス」と訓読されていた好例を語り物の『平家物語』卷第七「福原落ち」の最後の段落に、

あけぬれば、福原の内裏に火をかけて、主上をはじめ奉て、人々みな御舟にめす。都を立し程こそなければ共、是も名残はおしかりけり。海人のたく藻の夕煙、尾上の鹿の暁のこゑ、渚々による浪の音、袖に宿かる月の影、千草にすだく蟋蟀のきりくす、すべて目に見え耳にふるゝ事、一として哀をもよほし、心をいたましめずといふ事なし。昨日は東関の麓にくつばみをならべて十万余騎、今日は西海の浪に漣をといて七千余人、雲海沈々として、青天既にくれなんとす。孤嶋に夕霧隔て、月海上にうかべり。極浦の浪をわけ、塩にひかれて行舟は、半天の雲にさかのぼる。日かずふれば、都は既に山川程を隔て、雲居のよそにぞなりにける。はるくきぬとおもふにも、たゞつきせぬ物は涙也。浪の上に白き鳥のむれゐるをみ給ひては、かれならん、在原のなにがしの、すみ田川にてこととひけん、名もむつまじき都鳥にやと哀也。寿永二年七月廿五日に平家都を落はてぬ。

とあつて、「蟋蟀のきりくす」は、文選読みの例で、「蟋蟀」の訓が「コホログ」でなく、「ギリギリス」であつたことを示す明らかな証拠であると言える。

さらに、万葉集の第四期の人たちに大きな影響を与えた作品『玉台新詠集』（岩波文庫『玉台新詠集』鈴木虎雄訳解に拠る）には、

蟋蟀傷局促（巻一、雑詩九首の三）「東城高且長」

涼風動秋草 蟋蟀鳴相隨（巻二、魏文帝於清河見輓船士新婚與妻別一首）

蟋蟀在堂露盈階 念君遠遊常苦悲（巻九、陸機 樂府燕歌行一首）

の三例を見出すことができる。「蜚」は巻十「秋風歌」に一例ある。ただし、「蜻蛉」の例はない。また、『玉台新詠集』

註』には、

蟋蟀夜鳴断人腸 夜長思君心飛揚（卷九、「秋風歌」）

とあり、「蜚」は、「卷十、秋風」二首に一例ある。ただし、「蜻蛉」の例はない。

以上、中国詩文のいくつかの例を見てみたが、万葉集時代の、とくに、湯原王の周辺一つまり、万葉集編纂の有力候補である大伴家持も含めて―では、「蟋蟀・蟋」は、秋の虫を代表するものであって、「キリギリス」と訓まれていたはずで、それが、文芸的伝統として平安朝の文人・歌人たちに継承されて行き、『文選』李善注に「蔡邕月令章句曰、蟋蟀、虫名、俗謂之蜻蛉」とあるのによって、「コホロギ」は俗語として避けられて、「キリギリス」が雅語歌語（文芸的用語）として、多用されることとなったものと推定できよう。

八、おわりに

以上、古辞書等を例証に『万葉集』中の「蟋蟀・蟋」は、「キリギリス」と訓むべきことのみを指摘したが、「キリギリス」と歌われた昆虫が、今のコオロギかキリギリスか、あるいは、秋の鳴く虫の総称であったのかについては、後考を俟つこととし、紙幅の制約もあるので、筆を擱くこととし、大方の御教示を乞うこととしたい。

(注1)

『万葉集事典』(『別冊国文学46』平成5年8月)の「万葉集名歌事典—万葉名歌百首」の「8・一五五二」(毛利正守、執筆)に、ちなみに漢詩の世界を眺めると、すでに、月と露との情景に聴覚の蟋蟀の鳴く声を配した作品を見ることが出来る。晋の藩岳(はんがく)「秋興賦」(『文選』巻一三)などがそれである。繊細な素材は同時に悲秋の景物でもある。『古今集』以降の悲秋を先取りした感のある湯原王のこの歌も、あるいはこうした中国文学の影響のもとにあるとみることができようか。

(注2)

『大日本国語辞典』(上田万年、松井簡治。大正4年初版)の凡例に、萬葉集の如き、諸家の説によりて訓讀に異同あるものは、萬葉集略解を本とし、萬葉集古義其の他諸家の訓には、一一古義或は誰某の訓など記し、略解のみは特に之を記さず、両説の決し難きは各條に之を擧げ、妄に之を改削せず。とあって、『略解』を主としており、「こほろぎ」(蟋蟀)の項に、万葉集の「8・一五五一、10・一二五八」を挙げている。

(注3)

『万葉集童蒙抄』自体に、字余り・字足らずの例は多い。当該歌の前後の字余り歌の明らかな例を次に示せば、

伊香山野邊爾開有芽子見者公之家有尾花之所念
いかこやま、のべにさきたる、はぎみれば、きみが家なる、をばなしぞおもふ(8一五三三。笠金村作)

黄葉乃過麻久惜美思共遊今夜者不開毛有奴香

もみぢばの、すぎまくをしみ、おもふとち、あそぶこよひは、あけずもあらぬか(8一五九一。大伴家持作)

山遠京爾之有者狭小牡鹿之妻呼音之毛有香

やまとほぎ、さとにしあれば、さをしかの、つまよぶこゑは、ともしくもあるか(10二二五一)

白露乎取者可消去來子等露爾爭而芽子之遊將爲

しらつゆを、とらばけぬべし、いさやこら、つゆにきをひて、はぎのあそびせん(10二二七三)

とあり、他に、「巻八」には、23例

1418
1436
1450
1459
1473
1476
1480
1481
1510
1513
1567
1584
1595
1597
1599
1608
1620
1625
1632
1636
1638
1644

〔あり、「巻十」には、55例

1813
1820
1838
1882
1886

1894
1908
1941
1956
1967
1987
1995
2007
2012
2023
2024
2030
2060
2070
2086
2088
2091
2100
2101
2110
2111
2122
2169
2201
2205
2229
2230
2232
2236
2256
2258
2262
2263
2272
2278
2281
2286
2288
2290
2294
2300
2310
2321
2327
2337
2339
2340
2341
2342
2347

〕ある。

(注4)

後掲の『詩経』「豳風」の「七月」に、「十月蟋蟀入我牀下」とあり、『枕草子』「あはれなるもの」の段に、九月つごもり、十月ついでたち、ただあるかなきかに聞きわけたるきりぎりすの声。鶉(こはとり)の子抱(いだ)きて伏したる。とあり、また、「虫は」の段に、

コホロギはキリギリス

虫は、鈴虫。松虫。はたおり。きりぎりす。蝶。われから。ひをむし。螢。蓑虫、いとあはれなり。
とある。

〔注5〕『天徳三年關詩行事略記』（群書類従卷百三十四）に、

葦声入_レ夜催。_{爲_レ韻}以_レ寒

左。

順

葦声切切夜漫漫。欹枕還忘玉漏闌。不奈蟪蛄喧_三岸柳。何憐絡緯織_二庭蘭。藁邊怨遠風聞暗。壁底吟幽月色寒。傾_レ耳誰無_二秋興動。昔鳴_三軒屏_二感_三潘安。

右。

直幹

葦喧_二暮艸夜更闌。月影初斜露色團。山館雨時鳴自暗。野亭風處織猶寒。林辺響遶秋心急。枕上聲餘曉夢殘。德及_二昆虫微細類。□□得_レ令_三出_二聚端。

時尅漸久。殊有_二勅定。以_レ左爲_レ勝。勸_レ孟如_レ先。

とある。

〔注6〕古今6〔196
198
244
385
432
1020〕・後撰2〔257
258〕・後拾遺1〔273〕・金葉1〔218〕・千載2〔329
332〕・新古今6〔472
517
518
786
1388
1800〕

〔付記〕本稿は、大妻女子大学国文学会第57回研究例会（平成9年7月5日）において口頭発表した要旨のみをまとめたものである。後日、柳沢良一「きりぎりす考―虫の文学史の試み―」（『国語と国文学』87号、平成9年11月特集号）という好論を知り得たが、本稿に活用することはしなかった。後考に譲ることとした。